

ウチナー口の起源・序章

～サンスクリット梵語ぼんごが明かす大いなる秘密～

上原正稔著

■ サンスクリット

古代インドの言語：インド、ヨーロッパ語族に属し、ペルシア語、ギリシャ語、ラテン語などの西洋古典語と姉妹関係にある。特にヒンドゥ語に近い。中国に渡り梵語となり、仏教語として琉球、そして日本にも伝えられた。サンスクリットには「完成された言語」という意味がある。

目次

はじめに.....	3
ウチナー口の起源・序章.....	4
(1)ウチナー口に根を張った中国語.....	4
(2)神々しいまでのウチナー女性の名前.....	6
(3)人名、地名は全て梵語.....	7
(4)オヤケアカハチもトウバラーマもタンディ・ガー・タンディも梵語.....	8
(5)「おもろ語」も梵語で解明.....	10
(6)「ニライ・カナイ」の真実.....	11
(7)明らかになるウチナー口の数々.....	11
(8)神秘の祭事イザイホーの謎を解明.....	13
(9)若者よ、ウチナー口をしっかりと話し、誇り高く生きよ.....	15

はじめに

上原正稔はこの数年、図書館に通い詰め、2011年初頭「ウチナー口の起源・序章」と題する小冊子を発行し友人、知人に配られた。新聞で紹介されることはなかった。その内容は正にアツと驚くものだった。これまで意味不明だった無数のウチナー口が見事に解明されたのだ。

カナー、カマドゥ、ウシー、カニメガなどの女性の奇妙な名前に神々しい意味があることが判明したのだ。さらに、北谷^{チャタン}、伊是名^{メドルマ}、目取真^{ダナ}、田名^{ガジャ}、我謝などの意味のつかみ所のなかった人名、地名100ほどの詞の神聖な意味を明らかにしたのである。これだけではない。極楽でもあれば地獄でもあるとされてきたニライカナイの真実が明らかにされたのだ。

安里屋ユンタのマタハーリヌチンダラカヌシャマーという意味不明な言葉の真の意味を解明し、オヤケアカハチヤトウバラーマヤ宮古のタンディ・ガー・タンディの意味も解明した。首里城入口の守礼門の近くにそっと佇む園比屋武御獄^{スヌヒヤン}^{ウタキ}の意味も見事に解明された。庶民の手の届かなかった「おもろさうし」の「おもろねやかりや」という詞^{ことば}を始め、いくつかの「おもろ」詞を解明し、「おもろさうし」の全容解明を始めている。2011年のクリスマスには神秘の祭りとしてされている「イザイホー」の真の意味を解明した。

これらのウチナー口解明の鍵となったのが**梵語**である。さあ、これからコペルニクスの転回を見せる上原正稔の驚異の、そして感動の世界を訪ねてみよう。

ウチナー口の起源・序章

—サンスクリット梵語^{ぼんご}が明かす大いなる秘密—

しょうねん
上原 正稔

—われらはどこから来たのか。われらは一体何者なのか。われらはどこへ行くのか—

一世紀前、ポール・ゴーギャンはこの素朴な大いなる疑問をその作品に刻んでタヒチのヒバオア島に死んだ。そしてぼくの心のどこかにいつもこの疑問が存在している。自分が何者であるかを知ることがアイデンティティーの確立なのだが、今ウチナーンチュは自分を見失っている。どこへ行こうとしているのか、五里霧中だ。そんな中でウチナー口の起源を知るとは大きな意味があるだろう。

(中略)

(2) 神々^{こうごう}しいまでのウチナー女性の名前

かつて、と言ってもそれほどの昔のことではないが、ウチナー女性の名前はカナー、カマー、カマドゥー、カマラー、ウシー、ウサー、ナビー、カナシー、カニメガなど奇妙なものがほとんどだった。白い胡子(フージ)をはやしている僕にも子供時代があったが、あの頃は、女は鍋(ナベ)や窯(カマド)の傍らにいるからナビーやカマドゥーと名付けたのだろうと軽く考えていた。いや、実際は何も考えていなかったのだ。だが、黒い胡子が白くなり始める頃から疑問が湧いてきた。親が自分の子供にいい加減な名前を付ける筈がない。これらの名前には深い意味があるに違いない。

ウチナー口の本は数々あるが、人にとって最も大切なものの一つである名前の起源について触れている書物は皆無だった。この数年、図書館に足を運び、参考文献を探しているうちに、梵和辞典と出会った。

(中略)

(3) 人名、地名は全て梵語

さらに、これまで全く意味不明だったウチナーの人名や地名の多くがサンスクリットで見事に意味解明がなされている。その一部を紹介しよう。

(中略)

嘉手納(カデナともカティナとも発音されている) —kathina(カティナ=堅牢あるいは鍋) 北谷(チャタン) —catanya(チャタニヤ=知性) 謝名(ジャナ) —jana(ジャナ=人、民族) 恩納(ウンナ) —unna(ウンナ=水の湧き出る所) 小渡(ウドウ) —udu(ウドウ=星) 安谷屋(アダニヤ) —adya-taniya(アディアタニヤ=現在) 真玉(マダン) —madana{マダナ=愛の神(真玉橋には人身御供の伝説が残されている。愛の神の名は興味深い)} 名嘉(ナーカ) —nāka(ナーカ=天空) 水納(ミンナ) —mina(ミナ=魚、水族)

(中略)

(4)オヤケアカハチもトゥバラーマもタンディ・ガー・タンディも梵語

サンスクリット梵語で解明されるのは地名、人名だけではない。15世紀末八重山にはオヤケアカハチという英雄がいた。首里王府からすれば反乱軍の首謀者だ。その名の意味するところは全く不明だった。だが、これが梵語と知れば容易に意味が判明する。eka(エーカ)は数字の1で、「唯一の」とか「同一の」、「優れた」という意味がある。エーカがエーカまたはウェーカと発音され、「一族」⇒「親族」として定着した。アカは arka(アーカ)で太陽、ハチは pati(パティ)で王様を表す。すなわち、オヤケアカハチとは eka arka pati(エーカ アーカ パティ)が語源で「ナンバーワンの太陽王」だったのだ。

あのトゥバラマーとかトゥバラーマと呼ばれている八重山を代表する歌もサンスクリットであり、tva(トゥバ)とは「あなたの」、rāma(ラーマ)とは「女神」を意味し、トゥバラーマとは「あなたの女神」を意味している。